

防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第167号(2021. 2. 1)
事務局 川西地区自主防災会

南海トラフ地震後に後悔しないために、
これからの10年で何をするのか！

香川大学創造工学部教授 長谷川修一

3月11日で東日本大震災からまる10年が経過します。この10年間で被災地では、災害復興住宅の建設、100年に一度程度の地震による津波を防ぐ防潮堤事業、高台への集団移転、市街地の嵩上げ等、生活再建と復興に向けて様々な事業が展開されましたが、多くの街で人口減少と地域産業の衰退が加速しています。防災優先の防潮堤や復興事業が地域を持続できなくしているようです。東日本大震災の教訓は様々ですが、被災後に後悔し、また復興事業で後悔しないためには、被災前から減災対策を進めるとともに、地域が主体的に事前に復興計画を立てて、事業化を始めることではないでしょうか。



20年以内に南海トラフ地震が発生する確率は50%程度なので、少し早く10年後に南海トラフ地震が発生したとして、未来から今を振り返って、何をしたらいいのか、家庭で、地域で話し合いませんか？ 強い地震によって家が大きな被害を受ける前に何をしておいたらよかったのか、沿岸部の街が津波で壊滅的な被害を受ける前に何をしたら良かったのか、被災後の生活に備えて何を準備しておけばよかったのか、被災後どのような街に復興したらよかったのか、今から災害後をイメージして準備をしましょう。

まずは、3分間の揺れから命を守ることです。大地震後、消防機関も道路も被災しているので、大量のけが人を病院に運ぶことはできません。また、津波の浸水域外にある被災した医療機関に傷病者が殺到するので、医療崩壊はほぼ確実です。この時に新型感染症が蔓延したらと考えると、けがをしないことが生き残り医療崩壊防止の最低条件です。

香川県の市街地の多くは津波によって浸水しやすい沿岸部に立地しています。もし沿岸部にいたら、できるだけ、浸水想定区域外の標高5mより、高い場所に避難しましょう。場所によっては、地震後の液状化によって堤防等が被災し、浸水によって避難できなくなる地区があるので、事前に香川県のホームページやお住まいの市町のハザードマップなどで確認しましょう。そして、自分の身の安全を確保してから、家族などの安否確認をしましょう。そのためには、日頃から家族でどこにどのように避難するのか話し合っておきましょう。

南海トラフ地震のような超広域、超複合災害の際には、行政、ライフライン、流通等の機能が長期（1週間以上）停止するので、生き残った後に地獄の日々が始まります。少なくとも3週間、命をつなぐために、水、食料、衛生用品、簡易トイレ、非常用電源、燃料等を家庭で備蓄しておきましょう。

被災しても重要な事業は継続し、早期に社会の機能を回復しなければなりません。また、被災者の支援などには、若い力が必要です。特に学校等の教育機関は避難所に指定されていますので、教職員だけでなく、生徒、学生も支援者として活動できるように準備を進めましょう。専門分野を勉強している学生には、専門性を活かした特別インターシップを制度化して、被災者支援、復旧事業等を支援したいものです。災害現場は生徒、学生にとって貴重な学びの場と考えることができます。

被災者が茫然自失の時から中央では復興事業計画の立案が始まります。このときに、気をつけたいのが「ショック・ドクトリン（惨事便乗型資本主義）」です。被災者が茫然自失の時、グローバル資本主義に有利な規制改革や事業が一気に進み、被災地が取り残される可能性があります。また、資金繰りに困った企業や不動産が外資によって安値で買いたたかれる可能性もあります。惨事便乗型資本主義から国民を守る法制度と事前復興計画が急がれます。人口減少社会で、防災とまちづくりを一体として、いかに持続可能な地域をデザインして対峙するか、この10年が正念場です。

事務局だより

令和3年 2月

今月の事務局だよりは、川西コミュニティが行なっている「森の再生事業」の最近の取組みについて紹介いたします。

森の再生事業（竹編）

将来、ケヤキ、クスノキ、クログネモチ、更にはハナミズキ、桜、サザンカ等を植樹する場所確保のため、「竹林の伐採」作業

（1）伐採作業

16名参加によって、11月28日（土）～11月29日（日）に実施し、約1,500㎡にわたり伐採を行なった。

伐採は職人3名を雇用して行なったが、この後処理工程が大変であった。青竹は2メートルに切断して、10本程度にほうばくして、丸亀市のクリントピアへ搬送。トータル5トン、軽トラック約20車分。

竹林の中には枯れた竹が折りかさなっており、これを搬出して近かくの農地を借りて焼却処分。この量も青竹に負けず約5トン。

以上の後処理が12月の週末をかけて実施しました。12月の稼働約100人日、大変な作業になりましたが、この後の作業も困難をきわめました。



（2）強風により、残された青竹が倒れ、予想外の作業が発生

残された青竹は間引きして京都のお寺さんに負けなような「竹公園」を作ろうと考えていました矢先、12月末の強風によって、約100本が倒れるという事象が発生。

1月5日～6日にかけて、倒れた青竹を鉄工所から「シメラー・線張機」2台借用して、地面に垂直になるよう1本1本おこして近くにしっかりとっている竹と横通しのほうばく作業を行ないました。



（3）竹関連で最後の工程となる竹の根かぶと地中に縦横無尽に伸びている竹の根を除去する作業

レンタル会社よりバックホウ（シヨベル）を1月22日（金）～1月24日（日）まで借用してオペレータは2年前までコミュニティセンタ長であった高橋氏によって行なわれ、バックホウのポケットはスケルトンタイプを使用し、土中の土砂、根、石等をポケットにより掘りだし空中にて、4～5回ゆすることによって根、石等のみがポケット内に残る。この作業を繰り返して実施。

1月22日（金）は曇りの天候によって、計画通りに進みましたが、23日～24日は雨によって、根に付着している土砂がうまく分離せず、産廃土砂として、現場に残り、新たな処分方法を検討することになりました。



編集後記

2月の防災減災の輪は、香川大学創造工学部教授 長谷川修一先生の原稿を掲載させていただきました。ありがとうございました。